



書
評

日本近現代医学人名事典 別冊【1868-2019】増補

編：泉 孝英

A5・頁 256 2021 年 05 月 定価：3,960 円 [本体 3,600 円＋税]
[ISBN978-4-260-04261-1] 医学書院 刊

<評者> 四元秀毅 (国立病院機構東京病院名誉院長)



本書は、泉孝英先生（京大名誉教授）編による『日本近現代医学人名事典【1868-2011】』（以下、『事典』）を増補する別冊である。『事典』は、明治期以降（1868-2011 年）の日本の医学・医療の発展に貢献した 3762 名（物故者）の履歴を収めて刊行されたが、本書はこれを補って平成時代の終焉（2019 年）までの逝去者 933 名の方々の事績を収載し、さらに両書に及ぶ「人名総索引」、「書名索引」、「年表」、および病院史誌や学会史・医師会史などの「参考文献・資料」を添えている。

本書の紹介にあたって、先行する『事典』について触れておきたい。10 年近く前になる 2012 年に同書が刊行された際には、臨床医学・基礎医学、看護部門や医学・医療史など種々の分野で指導的立場にあった方々から書評が寄せられており、その多彩さは対象の幅広さを物語っていた。評者には、私の恩師の一人高久史麿先生 (<https://www.igaku-shoin.co.jp/book/detail/31209#tab4>) もおられ、その評では『事典』の内容を要約して、「紹介の対象になっているのは医師、医学研究者が大部分であるが、歯科医師、看護師、薬学、体育指導者、宣教師、事業家（製薬業）、工学者（衛生工学）、社会事業家、厚生行政の方、生物学者など、幅広い業種の方々であり、いずれもわが国の医療の発展に大きく貢献された方々である」とあった。

では、このように幅広い分野を対象とする『事典』の利用法はというと、まず特定の個人ないしグループの履歴調査の際の利用が挙げられるが、一方、読み物としてこれを楽しむ方法もあろう。さまざまな利用法のある『事典』について、後者の観点からその一端を

紹介したい。

本書を開くとさっそく、評者の先輩や同年配の知人、さらには後輩の名前さえあり、この十年足らずの歳月が一種の感慨をもって思い起こされた。ところが、p.4 には“尼子四郎”というやや意外な文字があった。その名はわが国の老年医学創始者の一人である“尼子富士郎”先生の父君として承知していたが、本書での登場は、時代的に不思議に思われたのである。そこでさかのぼって『事典』をひもとくと、「浴風会病院」の院長として、また父君から引き継いだ『医学中央雑誌』の編集者・代表者として献身された“尼子富士郎”先生の紹介が既にあり、本書が『別冊』として『事典』を補っていることを理解した。また『事典』には、夏目漱石が尼子富士郎先生の英語の家庭教師だったとの記載もあり、これは『吾輩は猫である』に“甘木先生”として登場する父君が漱石の家庭医だったことに符合する。一方、本書には、谷中で開業した“尼子四郎”先生が「(谷中で開業、) 千駄木に移転」とあるが、そこは漱石が借家生活を送った所で、歴史的事実をたどることができるきめの細かい記載である。このように、両書は、相補いつつ明治以降のわが国の医学・医療史を現在に伝えているのである。以上、若干の感想を交えながら本書の一端を紹介した。

このところわれわれはコロナ禍で苦労を強いられているが、そのような中で現実的対応のみに終始せず、例えばヒトと病原体との関係について学び直すなどの努力も必要なのではなかろうか。そして、その際にこのような書物の意義が再認識されるだろうと考えるのである。